



ピアノゼミナールに想うこと

——〈東音〉ピアノゼミナール40回を迎えるに当り——

福田靖子

いつの間にか〈東音〉ピアノゼミナールも40回を迎えようとしております。(3月29日 田村先生により開催)

声楽関係の当研究会々長・木下保先生による、「やまと言葉を美しく」は別としましても、ピアノ奏法系統的の研究やピアノ教材研究を加えますと約100回のピアノ関係の催物が開催されたことになります。

これらの会が続きましたのは、偏々に講師として御指導くださいました多くの先生方の深いお情と、それを支えた会員の皆さまの御力があつたればこそと、ただただ感謝申し上げるばかりでございます。

講師をお願い申し上げる時、謝礼らしい謝礼もでない研究会のこととて、いつも肩身の狭い思いばかりしておりますが、それをかえって温く励ましのお言葉など頂戴し、今日まで続いてまいりました。

どの位大勢の皆さま方の御力添えがあつたでしょうか。いつも定期的に会場を提供してくださるカワイピアノの皆様方、何かと御相談に乗ってくださるA先生・B部長・C課長・Dさん・E君……。昨年ヨルダ・ノヴィック先生が見えた時、個人レッスンの会場を貸して下さったヤマハの方々、時に新しい楽譜を御提供くださる出版社の方々、そして決してよいとは言えない所得に甘んじて研究会のために働いてくださっている職員の方々それは東京のみならず、全国各地に散在し、数えあげたらきりがありません。

本当に本当に有難うございます。これからもどうぞ末長く御導きくださるよう切にお願い申し上げます。

さてこの頃思いますのに「これからの音楽教育は？」ということでございます。

私事になって恐縮ですが、私の幼稚園の頃、お友だちの中でピアノを学ぶ者は殆どおりませんでした。それが三十年余りたった今日、幼稚園々児の殆どが、個人的にお稽古に通っております。しかし、それは何の目的で何をしようとして学ばれているのでしょうか。

それは、学ぶ側というより指導される方々にとって、目的というか目標というか、あるビジョンを持たずに、

指導されることは、何としても悲しいことではないかと思ひます。

かく申す私も、確たるビジョンなど持ち合せる者ではないのですが、こういう方法で果してよいのだろうか、と少くとも反省する機会を多く持つことができるようになったのは、このピアノゼミナールのお陰だと思っております。

現在、私は一人の生徒さんも持っておりませんが、やはり現場を離れた研究は、机上の空論になりがちだということを感じております。数年前のことですが、あらゆるピアノ教則本を研究したいために、同年輩の子供たちに、それぞれ違った入門書でピアノ導入を致したり、同じ入門書でも、異った年令の生徒たちに与えて、その効果を比べてみたり致しておりました。

次から次へと新しい教則本が出版され、それを十分に理解されずに書棚に置き去られているのを見ますと、再びこれらの教則本を実際に使用した上での研究をと考えております。

昨年計らずも知ったアメリカのジェームス・バスティンのメソッドなどは、しっかりした体系ができあがっていて大変面白いものだと思います。

私共の附属の音楽教室で系統だったこのメソッドによるピアノ教育をおこなってみよう、只今計画中です。

このジェームス・バスティンのピアノ教育と、コダーイ・システムによる音楽教育の類似点は、小さい子供においては、歌や動作から楽しみながら自然に音楽の道へ導き入れるという点でしょう。コダーイ・システムについて、それほどよく知っているわけではありませんが、このシステムがピアノスティックな訓練がそれほど強調されていないのに対して、ジェームス・バスティンのメソッドは、ピアノにもなり得るために、無理のないメカニクスの訓練も相当に折り込まれているように思ひます。

いずれ、その使用法・効用を逐次皆さまと一緒に研究してまいりたいと存じております。

そしてまた、ジェームス・バスティーンの方法の中に、不幸にして幼ない時からピアノに親しむことができなくて、大人になってからピアノを学ぼうとする人のためにも、効果のある一つのメソッドが作られていることも見逃だせません。

また20年間の体験をもとにして作られた、バイオリンの鈴木慎一先生の、ピアノメソッドの教則本も、昨年でしたが出版されております。ただこれは、会員制度をとって一般の方に、楽譜などを販売しないようです。こちらの方は、音楽を通じて美しい豊かな人間像をというねらいでメソッドが作られているせいか、アカデミックなピアノ奏法の道と少々異っている感じがしないでもありません。ただ、確かにこのメソッドを使って学んでいるお子さんたちは、他のメソッドでピアノのお稽古をされている同年輩のお子さん比べて、いわゆる上達が早い（早くむずかしい曲を弾かせてもらえるということ）ように思えます。

以上最近私が興味を持った、ピアノメソッドについて簡単に記しましたが、この三つのメソッドの共通した点は、すべて子供の幸福を願う考えが出発点となっているということでございましょう。

音楽は何のためにあるか、食べ物のように人間にとって不可欠のものでないように思えるこの「音楽」が、古代エジプトの時代から、人間教育の上でいつも重要な位置を持ち続けていることを考えますと、人間の幸福のためにこそ「音楽」の存在があるのだと思えるのです。

そこでこの幸福というものが、時代により、また人によりその質・尺度が異なりが故に、音楽もまたその時代により、人に対してもいろいろな顔を見せるのだと思います。

私たちピアノ教師を職業としている者は、この「音楽こそ幸福の源である」ということを認識した上で、子供たちの指導に当らねばならないでしょう。

それには、人間は二人と同じ人間はいないということ肝に命じなければいけないと思うのです。二人と同じ人間がないというのに、何年となく同じメソッドで、同じ方法で、子供たちを教えてよいものでしょうか。

100人の生徒さんがいたら100通りの指導法をノというのが、この頃の私の気持ちなのです。これは、100人の生徒さんに100冊の異った教則本で、という意味ではありません。同じ教則本でもいろいろな与え方があり、指導法があるでしょう。「先生は、それを一人一人の子供たち、それぞれについて、創造した教育をほどこしたいものだ」ということなのです。

よく世に名プロフェッサーとか、名教師とか言われる方がいますが、それらの先生方は、すべてとって良い位、一人一人の内なるものを Educate（引き出す）こと

に成功していらっしゃるのだと言えるように思います。

もちろん、人間が人間を教育するのですから、完璧ということはありません。

私はこの一人一人の子供が幸福になるために、一人一人個性に応じたメソッドを、という願いのもとに、音楽レッスン・ノートなるものを、度重ねての試作と実験の末、作りました。一口にいえば、子供たちの計画性ある練習の促進と、レッスン記録、先生と家庭との連絡帳などということができます。

お子さんたちに音楽を教えていらっしゃる先生方は、ぜひ使用していただきたいと思っております。そして、お使いになっての効果や、さらに改良を加えたい点などをぜひお教えいただきたいと思っております。

それから、ピアノの先生はやっぱり、弾ける先生に、という気持ちを持っております。もちろんピアノの演奏はあまりお上手でなくても、一人一人の個性を引き出すのがお上手で、立派な教授者もいらっしゃいますが、底辺を指導する私達にとって、少くとも子供たちに模範演奏ができるようにと念ずるのです。

リストやショパンを、模範演奏できるようにというのはありません。子供たちが弾く位の曲は、私たちが音楽的に弾いてあげたい、ということなのです。

（ハイクラスの先生方には、当り前のことで、今さらこと改めて申し上げる御無礼をお許しください。）

そこで、ピアノセミナーや、公開レッスンは、その奏法や指導法の研究、レポートに拡大のよすがとなることには大変効果があるものと信じますが、知識として得たものだけで、果して自分が弾けるかどうかとなりますと、疑問なのです。それが音楽教育の特殊性なのだと思います。音楽と技術は切っても切り離せないものなのですから。

そこで、本年から個人個人の実技訓練（レッスン）を加えた、研究生制度を実施したいと考えたわけでございます。もちろん、音楽大学で充分のピアノ実技の勉強をされた方や、卒業後も研究を続けていらっしゃる方にとっては、幼稚なものと写るかもしれません。

しかし、ピアノ教育に必要な事らについて、小人数が集り、弾き、そして語り研究することは、これからの音楽教育の理想に近づく一つの道だと信じます。

以上、〈東音〉ピアノセミナー40回を迎えるに当たり、思いつくまま記してまいりましたが、今ここに述べたことが、来年はまた進歩（変化）していることを望んでいる次第です。何故なら、これからも〈東音〉ピアノセミナーやピアノ奏法系統的研究が末長く続き、少しでも勉強させていただき、進歩したいと願うからでございます。（筆者は 本誌主宰）